

マハーラーシュトラ州ゴダーワリー川流域におけるマハーヌバーヴ派の調査報告

井田 克征 (人間社会環境研究科 客員研究員)

1. 調査の目的

報告者は、インド西部のマハーラーシュトラ州における民衆的なヒンドゥー教の一派であるマハーヌバーヴ派の発展史の研究を行っている。今回、平成22年度の金沢大学「文化資源学フィールドマネージャー養成プログラム」により2010年7月24日から8月29日までの期間にわたるマハーラーシュトラ州での現地調査の機会を得た。この調査は、特にマハーラーシュトラ州北部を流れるゴダーワリー川沿いに点在するいくつかの都市を主要な調査地とし、マハーヌバーヴ派の実態調査を行うものである。この地域が選ばれたのは、ゴダーワリー川がマラーティー語圏においてガンガーと目される聖なる川であり、この川に沿って多くの重要な聖地があることと、マハーヌバーヴ派が開祖チャクラダル以降、常にこの地域を本拠地として活動してきたことを理由とする。

今回の調査においては、まず現地のマハーヌバーヴ派の信徒および寺院、アーシュラムなどの現状を確認することが第一の目的となる。近代以降はその存在すら疑われるほど勢力を弱めたマハーヌバーヴ派が、現在どの程度活動しているのか、そして秘儀的な性格の強いこの派の宗教実践に外部者が踏み込んで観察・調査できるのか。今後の研究を進めるうえで、まずはこうした点を確認することが緊急の課題であった。

そして第二の目的は、彼らが保持している聖典を収集して、より精密な文献調査の道筋をつけることである。すでに刊行されたいくつかの原典資料を除けば¹、この派の聖典の多くは個人所蔵の写本としてのみ存在する。それゆえ本調査には、そうした写本類の所在を確認して重要な資料を複写収集するのに加えて、将来的に行う予定のマラーティー語資料の所蔵カタログ作成の予備的な作業という意味合いも含まれている。

そして第三の目的は、マハーヌバーヴ派とも密接に関わるワールカー派や、それ以外の地方的信仰の現状を確認することである。これはマハーヌバーヴ派をマハーラーシュトラの宗教文化の全体の中に位置づけるためには必須の作業であると思われる。

2. 前提

2.1. 大伝統と小伝統

インドのヒンドゥー社会を考える際に、しばしば大伝統と小伝統という枠組みが用いられる。これはきわめて多様な側面を持つインドの宗教文化を、エリート的・汎インド的な大伝統と、大衆的・局地的な小伝統という二つの位相から成り立つものと考え、その両者のダイナミズムの中で諸々の宗教現象を説明するものである。

このような枠組みを採用する場合、大伝統とは、主にバラモン司祭が中心となって執り行われる諸々の宗教儀礼や慣習、そして彼らが保持するサンスクリット語の聖典群に見出される神話体系などを意味している²。こうした大伝統は、ヴェーダ聖典に基づくバラモン教が中世においてヒンドゥー教へと展開し、現代に至るまでの長いインドの宗教史の、いわばメインストリームとして位置付けられてきた。

これに対して小伝統とは、ごく限られた地域やコミュニティの中だけで信仰されているマイナーな神格や、宗教実践などを指している。こうした信仰は多くの場合口頭で伝承されるか、もしくは現地語で書かれた小冊子や讃歌集の類が小規模に流通する程度である。そしてオーソドックスなヒンドゥー教とは違って、バラモン以外の、特に低位カーストの人々が積極的に関わる場合が多い。それゆえこうした小伝統は、特定の地域、社会集団に属さない部外者にとっては「隠された」ものとなりがちである³。

大雑把に言えば、大伝統はその周辺部に位置する小伝統を取り込むことで、自らの領域を広げ、複雑なものへと変容してきた。そして小伝統はしばしば大伝統を参照し、その「正統的な」教義や神格グループにならって自らの信仰形態を変容させたり、その意味を読み替えたりしてきたのである。こうした例として、プラーナ聖典に見られるヴラタ儀礼や⁴、ローカルな神格が近代化の中で次第にサンスクリットの神格と同一視されるようになる経緯などが知られている。

これまで多くの南アジアの宗教文化研究は、この大伝統—小伝統のシェーマを自明のものとし、大伝統的な神格や宗教規範、儀礼などの観念体系を参照しつつ、個別の小伝統を取り扱うことが多かった。こうした枠組みは、時にあまりに無秩序なインドの宗教現象に中心と周縁、もしくは上位と下位といった対立的な見方を与え、最低限の秩序を保証するものであった。しかしながら一方で、そうした見方では説明しにくい宗教現象もまた当然ながら数多く存在する。そうした例として、例えばカルナータカ地方におけるリンガーヤト派や、タミルのアールワール、そして本研究の主題となるマハーラーシュトラのワールカリー派、マハーヌバーヴ派などが挙げられる。これらの信仰は、地方において、ローカルの言語でのみ展開し、また正統ヒンドゥー教とは異なった実践や教義を固守しているという点において、小伝統と呼ばれるべき性格を示している⁵。しかしながら、その地域においてはオーソドックスなサンスクリット文化に負けずとも劣らない程度の権威を持っている場合があり、他のマイナーな信仰などに対して規範的に機能しているのである。

本研究の対象となるマハーラーシュトラ地方では、マラーティー語で展開した地方的なバクティの宗教と、バラモン中心のサンスクリット的な正統ヒンドゥー教とが混じりあいながら、人々の宗教生活を成り立たせている。こうした状況の中で、両系統の信仰の間に上下関係が存在するようには見えない。むしろこの地方の人々は二つの「大伝統」を保持している、もしくは「大伝統」などというものは存在せず、ただ無数の小伝統がネットワーク状に存在していると考えべきなのかもしれない。

2.2. マハーラーシュトラのバクティズム：ワールカリー派とマハーヌバーヴ派

本研究では、インド西部のマハーラーシュトラ地方において12世紀以降に展開した、非サンスクリット的なバクティ信仰の系譜を取り扱う。8-9世紀以降のインドにおいて流行した、個人が唯一の神格に対して熱情的に帰依して、恩寵としての救済を求めるような宗教運動を、バクティと呼ぶ。バラモン司祭によって主導されたヒンドゥー教が、儀礼と苦行とを重視するエリート主義的な信仰を核とするのとは対照的に、新しいバクティの信仰は、民衆が直接的に神と向き合うことを可能とした。こうしたバクティ運動の流行の中で、だれにでも明快に意味の通じるマラーティー語で

神への熱情的なバクティを説いて大衆の支持を得たのがワールカリー派とマハーヌバーヴ派であった。

2.2.1. ワールカリー派

ワールカリー派は、ヴィツタル神ないしヴィトーパー神と呼ばれる神格を信仰の対象とする集団であり、今日ではマハーラーシュトラ州の全域において見出される。このヴィツタル神は元来カルナータカ地方の土着的な神であったと言われているが、現在ではマハーラーシュトラにも定着し、ヒンドゥーパンテオンの中のヴィシュヌ神の化身 (*avatār*) として理解されている。この神格の像は多くの場合、両腕をまげて腰に当てた独特のポーズをとり、頭にはターバンを巻いた姿で表される (図版1)。

マハーラーシュトラ州の南を流れるビーマー川のほとりにあるパンダルプールという町が、ワールカリー派の中心地である。ワールカリー (*Vārkarī*) という語が、「(年毎に) 巡礼する人々」を意味することから明らかなように⁶、彼らは年に二度、カールツェイク月とアーシャディー月の陰暦11日目 (エーカーダシー) に西インドの各地からこのパンダルプールへと巡礼に訪れる。この時期に、聖者の足跡 (*pādūkā*) を入れた神輿を引いたワールカリー派の行列が、各地の宿泊所にとまりながら何日もかけて移動する。2010年のアウシャディーエーカーダシーの日には、60万人もの巡礼者がこの町を訪れて話題となった⁷。

この派の起源は13世紀に遡る。ワールカリーの伝承では、プンダーリクと呼ばれる聖者が創始者として言及されるが、実際のところ、彼に関する古い資料はほとんど何も残っていない。実質的にこの派が大きく発展したのは、13世紀末のジュニャーネーシュワルの時である。追放バラモンの家庭に生まれ、不可触民のもとで育てられた彼は、幼いころから数々の奇蹟を起こし、20歳足らずで悟りを得て入滅したと伝えられている。彼はサンスクリットの聖典 *Bhagavadgītā* に対して、マラーティー語で注釈を著した。著者の名前から *Jñāneśvarī* と呼ばれるこの注釈書は、ヴィツタル神を正統ヒンドゥー教の中心的神格であるヴィシュヌ神と同一視して、この最高神へのバクティを説いたものである。このローカルな信仰を正統ヒンドゥー教の伝統に接続する注釈書は、それ以降のワールカリー派において最も重要な聖典となった⁸。

その後もワールカリー派からは、トゥカーラムやエークナートなど数々の聖者達が生み出された。

彼らが残したマラーティー語の聖典や、神への讃歌 (*abhang*) もまた、サント (聖者) 文学として、ワールカリー派のみならず広くマラーティー語圏において親しまれた。彼らの活躍した時期は、デカン地域のマラーターの人々がムスリム支配に抵抗する中で次第に民族意識を高めていく時期とも重なっており、この地方に独自のマラーター文化を花開かせる大きな要因となった⁹。

そして最後にもう一つワールカリー派の特徴として挙げておくべきことは、この派がバラモン外の人々に大きく開かれていたという点である。この派のサント達の中でも最もすぐれた詩人とされるトゥカーラムはクンビーカースト出身であると伝えられているし、また不可触民マハール出身のツォッカーメラーのような聖者も存在する。そしてジャーバーイーのように、女性のサントも存在した¹⁰。一方でエークナートやラムダースのようなバラモン出身の聖者達の存在は、この地方固有のヴィッタル神信仰を、正統ヒンドゥー教の中に位置づけることに大いに役立った。このようにマハーラーシュトラの上から下までのカーストすべてを巻き込みつつ、ワールカリーの信仰はこの地方において大伝統のごとき位置を占めるに至ったと言えるだろう。

2.2.2. マハーヌバーヴ派

ワールカリー派がその後の歴史の中でマラーターの人々に強く支持され、マハーラーシュトラ文化の基層となっていくのに対して、マハーヌバーヴ派はごく限られた人々の間で秘儀的に伝授され、多くの信徒を獲得するには至らなかった。ワールカリー派にも大きな影響を与え、この地方におけるバクティズムの基盤を築いたと言われるマハーヌバーヴ派は、現代に至っては絶滅寸前の「隠れ信仰」になったとすら言われていた¹¹。

マハーヌバーヴ派は、ワールカリー派にわずかに先行して13世紀の中頃、チャクラダルスワーミンと呼ばれる人物によって創始された。伝承によれば彼はグジャラートでバラモン家庭に生まれ、マッラデーヴァ王のもとで大臣を務めたという。その頃の彼は妻帯し、特に宗教的な生活を送っていたわけでもなかった。1221年に彼は突然の死を迎えるが、魂の抜けた彼の身体にチャクラパーニ (後に彼の *grand-guru* となる) の魂が入ったことで、復活をとげる。この後遊行に出た彼は、北部マハーラーシュトラのリッディプルにお

いて師ゴーヴィンダプラブと出会うことになる。そしてこの後の彼は、ゴードーワリー川流域を中心にマハーラーシュトラの各地を遊行しながら教えを説いた。1274年に彼が亡くなると、彼の弟子たちはゴーヴィンダプラブのもとに身を寄せて、チャクラダルの言行や教えを聖典に編纂した。

この頃のチャクラダルの教団には、女性の信徒の姿が目立ったと言われている¹²。そしてワールカリー派同様に、彼の教えは非バラモンカーストの人々にも広く開かれており、出家者 (*sannyāsī*) の生活において、生まれの区別は存在しないとされた。個人は最高神 (*Parameśvar*) の前に平等であり、最高神への帰依によって平等に解脱がもたらされる。そうしたバクティの観念はワールカリー派とも共通するが、この派に特徴的なのは、世俗を離れた出家生活の重視である。マハーヌバーヴ派は、現在でも人里離れた僻地にアーシュラム (修行場) を作り、そこで誓戒を守りつつ共同生活を営むことを奨励する。

同派では、最高神はパンチャクリシュナ (五体のクリシュナ) と呼ばれる五体の化身として地上に姿を現したと考えられている (図版2)。それはクリシュナ神、ダーツタ神、そしてチャクラパーニ師、ゴーヴィンダプラブ師、チャクラダルである。このパンチャクリシュナの教義はチャクラダルの弟子たちによって後に作られたものと考えられるが、いずれにせよマハーヌバーヴ派がヒンドゥーパンテオンの一端を担うクリシュナ神を信仰の中核におくことは明らかである。この点では、マハーヌバーヴ派は出自不明の土着的な信仰というよりはむしろ正統ヒンドゥー教の地方における独自の展開という側面が強いとも言えるだろう。

この派の基本的な聖典としては、チャクラダルの死後1278年に彼の弟子マーイーバッタによって著された *Līlācaritra* が存在する。この聖典には、チャクラダルの行状とともに彼が折々説いた教えがまとめられている。そして後にケーシーラージュにより *Līlācaritra* から教義部分を抜粋して編纂した *Sūtrapāth* (1290頃) や、チャクラダルの後継者ナーグデーヴの言行録 *Smṛtisthal*などを皮切りに、多くの聖典が13から14世紀にかけて編纂された。これらの聖典はマラーティー語で著されているが、その形式においてはサンスクリット文献に準じた晦渋なものが多かったため、民衆に親しみやすいものとはならなかったと言われている¹³。

14世紀初頭までは隆盛を極めたマハーヌバーヴ派

は、その後教団の分裂と再統合を経て弱小化し、次第にマハーラーシュトラにおける存在感を失っていくことになる。

3. 調査日程

- 2010年7月24日
金沢発
- 2010年7月25日
プネー着
- 2010年7月26日—30日
プネーにてマハーヌバーヴ派の調査
- 2010年7月31日—8月4日
パイタンにてマハーヌバーヴ派などの調査
- 2010年8月5日—6日
アウランガバードにてマハーヌバーヴ派の調査
- 2010年8月7日—12日
プネー周辺にてマハーヌバーヴ派の調査
- 2010年8月13日—22日
ナーシク周辺にてマハーヌバーヴ派などの調査
- 2010年8月23日—27日
プネー周辺にてマハーヌバーヴ派・ワール
カーリー派などの調査
- 2010年8月28日
ムンバイ発
- 2010年8月29日
金沢着

4. 調査報告

以下では、今回のマハーラーシュトラ州において行われた調査の概要を、調査地毎に述べる。

4.1. プネー

プネー市では、マハーヌバーヴ派の信徒数名と接触した。中でも市内のカレッジにおいて校長を務めるR氏は、マハーヌバーヴ派の熱心な信徒としてこの地域の有力者であるとともに、彼自身が古い写本の収集家である。また彼を通じて、マハーヌバーヴ派の信徒が中心となって発行している小雑誌の存在を知ることができた。そうした現代の印刷物の中で、啓蒙的に書か

れたチャクラダルの教えに関するエッセイなどの中には、マハーヌバーヴ派の人々が自らの新しいアイデンティティを、正統ヒンドゥー教とは少し異なったマハーヌバーヴの教えの中に追究しようとしている様子が見て取れる。これに関しては最後にもう一度触れることにする。

そしてR氏所蔵の写本コレクション（図版3）に加えて、市内の幾人かの個人蔵の写本の存在を確認し、その中には未公刊かつ重要な資料が存在することを確認した。またプネー市内のマハーヌバーヴ僧院内に数多くの写本が保存されていることを確認した。こうした写本調査に臨むにあたっては、Raeside 1960が参考になった。ただしこの僧院内の写本に関しては、学術利用の許可はまだ取れていない（僧院長不在につき）。

プネー市内ガネーシュペートにある、上記の僧院付きのマハーヌバーヴ派寺院を訪問した。この小さな寺院は外観上はごく普通のクリシュナ寺院であるため、近所でもマハーヌバーヴ派寺院であることはほとんど意識されていないようであった（図版4）。マハーヌバーヴ派の多くの寺院では、チャクラダルもまたパンチャクリシュナの理論にもとづいてヒンドゥー教徒にとってなじみの深い笛を持った牛飼いきりシュナ神の姿をとって表象される場合が少なくない。この寺院においても、チャクラダルは笛をもったクリシュナの姿をしていたが、ワールカーリー派のヴィツタル神同様にターバンを巻いている点が特徴的である（図版5）。こうしたターバンが、マハーラーシュトラのローカルな信仰に共通する傾向であることは興味深い。

この寺院はごく小さな寺院で、僧院にも十数名の出家者が生活しているのみである。しかしながら有力なマハント（僧院長）の下、プネー行政区のマハーヌバーヴ派集団に大きな影響力を持つ重要な寺院であると聞かされた。

この寺院において、一日に行われる儀礼スケジュールや、年間の祭日等およびそれらの式次第を調査した。多くの儀礼は、朝夕のプージャーなどのように、オーソドックスなヒンドゥー寺院と変わらないが、ヴェーダ由来の文言を詠唱する代わりに、マラーティー語の讃歌を唱えるのがこの派の儀礼の特徴と言えるだろう。また今回は確認できなかったが、正統ヒンドゥー教においてクリシュナ神の誕生日とされるジャンマーシュタミーの祭日には、この寺院においても夜を徹しての祭りがおこなわれる。その際にも、やはり通常のヒンドゥー教寺院においてジャンマーシュタミーの日

に行われる祭礼と同様に、朝のムールティアビシェークからはじまって数度のアールティーを行いつつ、夜明かしに入る。この時に歌われるのは、マラーティー語の讃歌などであるとのことである。

またプネー市内外において、ワールカリー派のサント達の廟や、ヴィツタル寺院などにおいて予備的な調査を行った（図版 6, 7）。これらのワールカリー派の寺院などは、近年また人気が高まっており、多くの人を集めている。地方紙にはそうした寺院のコミッティーに多額の寄付が行われたというニュースがしばしば掲載される¹⁴。しかしながらすべてのマラーター的な信仰が人気を集めているというわけではなく、NRIをも含めた富裕層が支持するシルディ・サイババやジュニャーネーシュワルなど、ある程度地方性を残しつつも「クリーンな」信仰に人気が集まる傾向が見て取れる。

4.2. パイタン

この地は、ワールカリー派の開祖ジュニャーネーシュワルが滞在して Jñāneśvarī を執筆した土地であるとともに、エークナートが入滅した場所としても知られている。この街のはずれのゴードーワリー川の岸に、有名なエークナートの寺院が存在する。この寺院は、現在でもエークナートの子孫といわれる人々の手で運営されている（図版 8, 9）。彼らはこの寺院においてはプジャリに相当する役割を果たしているが、男性のみならず女性もまた壇の上に座って信徒の供物を受け、プラサードを与えることが許されている点には注意が必要である。

寺院内にはジュニャーネーシュワルをはじめとした多くのワールカリー派のサント達が祀られているが、正統ヒンドゥー教的な神々は全くと言っていいほど見られなかった。そしてこの寺院へ向かう参道沿いにはさほど古くないヴィツタル寺院が存在し（図版 1）、そして参道の入り口にはカントーバー悪魔の廟がある¹⁵（図版 10）。

この地はマハーヌバーヴ派にとってはチャクラダルが滞在して最初の女性の弟子をとった場所として知られている。この地にはパンチャクリシュナの第二にあたるダッタ神の寺院が、マハーヌバーヴの僧院に並んで建てられている（図版 11）。

寺院内には座壇 (*ota*) がしつらえられてある。この座談は昔チャクラダルや他の師達が座り、教えを説いた壇であるとされており、この壇もしくは壇の上に

安置された神像を礼拝することが、この派の特徴であるとされている（図版 12）。

4.3. ナーシク

聖地ナーシクは、マハーヌバーヴ派でも有数の巡礼地として多くの人々が訪れる。この町にある有名な沐浴場では、さまざまな祖霊祭や儀式が行われてにぎわっている。この沐浴場の中に、マハーヌバーヴ派の小さなチャクラダル寺院が存在する。

またナーシクの中心から少し離れたシンナールにも、同派のシュリークリシュナ寺院が存在する。この寺院において、朝夕のプージャーを観察し、信徒たちに話を聞いた。ここのプジャリは出家者ではなく、世襲であるという。現在では三人の兄弟が、ローテーションを組んでプジャリの仕事を行っている（図版 13, 14）。彼らは寺院の外に通常の仕事も持っている。

ナーシク市街から 30km ほど離れた荒野に、近年新しく開設されたマハーヌバーヴ派のアーシュラムが存在する。ナーシクにおいて熱心に活動するマハーヌバーヴ派の在家信徒 A 氏によれば、ナーシク行政区内だけでもこうしたアーシュラムは五つほど存在し、マハーヌバーヴ派全域では数十カ所にのぼるであろうとのことであった。

この新しいアーシュラムは、7 年前にサーターラーから来たラーマバーイーという女性が興し、現在の僧院長を務めている。彼女は元々はムンバイにて生まれ、若い頃に出家したという。このアーシュラムには 20 人以上の出家者が生活しており、そのうち女性が 15 人、男性が 7 名程度とのことであった。特に女性には老齢の女性が多いようであったが（寡婦である可能性が高い）、子供も 7 名ほどいた（図版 15-17）。出家者全員と話したわけではないので、印象ではあるが、それぞれの出身地はナーシク近辺のみならずマハーヌバーヴ派の全域に渡るようだった。このアーシュラムの生活を支える在家信徒の数を尋ねたところ、きちんとした管理はされておらず、おそらく数千人規模であろうとの回答が返ってきた。

今回の調査では、このアーシュラム内での一日のタイムスケジュールを確認し、いくつかの礼拝を観察した。ここでもまた他のマハーヌバーヴの寺院等と同様に、朝晩のプージャーと、正午などに行われるアールティーが儀式的中心であった。そして早朝のダーラナーや、深夜のスマランなど、個人的に行われる瞑想儀礼の存在も確認された。さらに午後の 3—5 時にかけて

では、時間があればマハントによるレクチャーが行われるという。

5. 調査の成果と展望

以上の調査の結果を総括する。まず第一に、写本資料に関しては、比較的入手し易い資料の所在をある程度確認し、今後のカタログ作りへの見通しを得た。

そして第二に、現地で多くの儀式や、宗教実践を観察した。その結果として、現在のマハーヌバーヴ派が、特に寺院儀礼や年中儀礼などにおいては正統的なヒンドゥー教とほとんど変わらない儀礼を行っているという点が確認された。ざっと見たところこれはワールカリー派の祭礼などにも言えることであり、サンスクリット聖典がマラーティー語の讃歌 (*abhang*) に置き換わったことを除いて、多くの儀礼要素がサンスクリットのヒンドゥー教からそのまま導入されているのだと思われる。

しかしながらワールカリー派などよりも「閉ざされた」信仰であったマハーヌバーヴ派は、独自の慣習やスタイルを保持している。信徒や出家者が身にまとう独特の衣と頭巾 (男性はしばしばピンク色の衣をまとい、老齢の女性は黒をまとう場合が多い)、それに信徒同士が交わす「ダンドヴァティー」という挨拶などは、この派以外では目にすることがない。これは勢力を弱めながらも、オーソドックスなヒンドゥー教の中に派の見込まれることなく彼ら自身の伝統を伝えてきた一つの要因とも言えるだろう。

そして最後に、マハーヌバーヴ派の人々が、現代社会においてマハーヌバーヴとしてのアイデンティティを打ち出そうとしている様子を、つぶさに確認することができた。信徒の中には、マハーヌバーヴの教えをきちんと学び、マハーヌバーヴとして積極的に発言していこうという機運が高まっている。そうした動きは特にナーシクやプネーのような都市部において顕著である。彼らの多くは近代的な職業に従事し、生活にはそれなりに余裕があるように見える。そうした人々がマハントのもとに通ってレクチャーを受けたり、勉強会を開いたりして、また啓蒙誌などの刊行を支えている。これは大きく言えばインド全体に見られる伝統の再評価の動きにも連なるのであろうし、彼ら自身の事情で言えば非バラモンの出自のアイデンティティの源としての、マハーヌバーヴであろうか。

たとえば 20 世紀に入ってからのカルナータカ州では、リンガーヤト派のコミュニティが自らを前近代的なヒンドゥー教徒とは異なる合理的な社会集団であると自己規定することで団結を高め、近代化の中で大きな政治力を得ていったと言われている。現代のマハーラーシュトラにおけるマハーヌバーヴ達もまた、カースト差別や女性差別を否定する、現代的な視線にも耐えうる倫理としてマハーヌバーヴの教えを前面に出し、自らのコミュニティを盛り立てていこうとしているように思われる。こうした印象は、今回の調査で関わった熱心なマハーヌバーヴの活動家の多くが非バラモン階層の出身者であるのに対して、バラモン出身のマハーヌバーヴ関係者はどちらかと言うとマラーティー文学や言語学を専門とする研究者の中に多く見られたという点にも関連するだろう。後者の関わり方は、もう少し広い枠でマハーラーシュトラ文化のルーツとしてマハーヌバーヴを考えるものである。いずれにしても、両立場の間には密接な協力関係が存在し、今後のこの分野の研究は進んでいくであろう¹⁶。

報告者は、古くから伝わる文献資料を分析することでマハーヌバーヴ派の思想を明らかにし、ヒンドゥー教史の中に位置づけるという課題に取り組むとともに、上で述べたような現地社会の動きにも十分に注意を払い、この信仰がかつてマハーラーシュトラの近代化において果たした役割、そしてさらに現代社会において果たす役割について、考えていきたいと思っている。もう少し具体的に言えば、現代のマハーラーシュトラで活動しているマハーヌバーヴ派の信徒グループや寺院組織を継続的に観察し、彼らがコミュニズムや農村の貧困問題などという現代的な問題にどのように対応していくのかを調べていきたい。すでに来年度の予定として、R 氏の助力のもとに写本調査を行いつつ、ナーシクにおけるクリシュナの誕生祭の開催にまつわる人々の活動を調査することが決まっている。

文化資源学という枠組みで行われているこの研究は、単に現地に残っている資料や現象を収集、分析れば事足りるというようなものではないだろう。文化資源という概念は、それぞれの社会に固有の文化的な継承物が、常に新しい時代背景の中で二次的に利用され得るのだという考え方を前提とする。であるなら、中世の聖典群という文化資源が現代社会の文脈の中でいかに新しい命を獲得していくのかという視点をこそが、今後の研究の中核となるべきであることは明白であろう。

参考文献

Feldhaus, Anne, *Water & Womanhood: Religious Meanings of Rivers in Maharashtra*, New York/Oxford: Oxford University Press, 1995.

Raeseide, I. M. P., “A bibliographical Index of Mahānubhāva Works in Marathi”, in *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 23, 1960, pp. 464-507.

Raeseide, I. M. P., “The Mahānubhāvas” in *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 39, 1976, pp. 585-600.

Raeseide, I. M. P., “Dāttareya” in *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 45, 1982, pp. 489-500.

Sellergren, S., “Janābāi and Kānhopātrā: A Study of Two Women Sants”, in *Images of Women in Maharashtrian Literature and Religion*, ed. by A. Feldhaus, Albany: SUNY Press, 1996, pp. 213-238.

島岩「デカン・バクティと不可触民」『叢書カースト制度と被差別民第一巻・歴史・思想・構造』山崎元一，佐藤正哲編，赤石書店，1994年。

Shima, Iwao, “The Viṭhobā Faith of Mahārāṣṭra[sic.]: The Viṭhobā Temple of Paṇḍharpūr and Its Mythological Structure” in *Japanese Journal of Religious Studies* 15/2-3, 1988, pp. 183-197.

Singer, Milton, *When A Great Tradition Modernizes*, New York: Praeger Publishers, 1972.

Sontheimer, G.D., *Pastoral Deities in Western India: Birobā, Mhaskobā, and Khaṇḍobā*, New York/ Oxford: Oxford University Press, 1989.

Tulpule, S. G., *Classical Marāṭhī Literature*, A History of Indian Literature, vol. IX, fasc. 4, Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1979.

Tulpule, S. G., “Cakradhar and Women”, in *Images of Women in Maharashtrian Literature and Religion*, ed. by A. Feldhaus, Albany: SUNY Press, 1996, pp. 201-211.

1 Raeseide 1960 参照。

2 M.Singer はそうした大伝統 (great tradition) を, M.N.Srinivas のいう “Sanskritic Hinduism” や, Monier-Williams の “Brahmanism” とほぼ同じものとしている (Singer 1972: 68)。

3 Feldhaus によれば, マハーラーシュトラの女性たちが行う Sāṭī Āsarā 信仰は, 時にバラモン司祭のような上位文化に属する人々には不可視のものとなっている場合も珍しくない (Feldhaus 1995: 12)。

4 現代でもヒンドゥー教徒の女性が行っているヴラタ儀礼は, 本来のヒンドゥー教には含まれていなかったと思われる要素が数多く見出される。井田 2008 参照。

5 たとえばカンナダ語地域において 13 世紀以降に発展したリンガーヤト派は, 自らをヒンドゥー教徒とは考えていない。

6 Deleury 1994: 2.

7 2010 年 7 月 22 日付 Sakāl 紙。近年, パンダルプールへの巡

礼者は増加し続けているという。

8 Tulpule 1979: 330-4.

9 こうしたマラーター人の民族意識とワールカリー派の関係については島岩 1994:232 参照。

10 Sellergren 1996 参照。

11 島岩 1994:229 参照。また Raeseide は, かつてのチャクラダルの教えをほとんど喪失していたマハーヌバーヴ派が, 20 世紀に入ってから改めて聖典を整理し, 自らの古い教義を学び直している様子を描いている (Raeseide 1976: 588-9)。

12 Raeseide 1976: 587; Tulpule 1996: 204.

13 島 1994:229 参照。

14 Sakal 紙 2010 年 7 月 28 日にはパンダルプールのヴィッタル寺院に, そして同月 23 日や 2011 年 1 月 3 日にはシルディのサイババ寺院に, それぞれ高額の布施が行われたという記事が掲載された。

15 Sontheimer によれば, 現在はバイラヴァないしシヴァ神とも同一視されるこの神格は, デカン地方の荒野に起源をもつ, 荒ぶる聖霊であったと考えられる。Sontheimer 1989 参照。

16 ナグプール大学の Prof.Kolte は, このマハーヌバーヴ派の聖典研究において先駆的な仕事を行った人物であった。彼のもとには, 聖典の正しい解釈や細かな規定の確認などをめぐって, マハーヌバーヴ派内部の人々からの質問が絶えなかったという (Raeseide 1976:589)。すでに Kolte は亡くなったが, 報告者の調査中にもしばしば「詳しいことは IMP (Prof. Raeseide のこと) に聞け」というマハーヌバヴ達の発言が聞かれた。



図版1 ヴィッタル神 (パイタン・ヴィッタル寺院)



図版4 マハーヌバーヴ派シュリークリシュナ寺院
(プネー・ガネーシュペート)



図版2 パンチャクリシュナ



図版5 チャクラダル像 (プネー・シュリークリシュナ寺院)



図版3 R氏所蔵写本コレクション



図版6 トウカーラームへのプージャー。後列左はヴィッタル、右はルクミニ像 (プネー・トウカーラーム廟)



図版7 ジュナーネーシュワル寺院 (アーランドイー)



図版10 カンドーバー (パイタン・カンドーバー廟)



図版8 エークナート寺院 (パイタン)



図版11 ダッタ寺院境内のサンニャシーたち (パイタン・ダッタ寺院)



図版9 エークナート寺院内部 (パイタン)



図版12 座談の上に祀られたダッタ神。取り囲む四つの円は、他のアヴァタールを意味している。(パイタン・ダッタ寺院)



図版 13 マハーヌバーヴ派シュリークリシュナ寺院（シンナール）



図版 16 チャクラダルに礼拝する男性信徒（ナシーク）



図版 14 礼拝する信徒とプジャリ（シンナール）



図版 17 女性居住区（ナシーク）



図版 15 マハーヌバーヴ派アーシュラム：右手は男性居住区，奥はマハントの部屋（ナシーク）